第14回

繁殖のお話し（その14　寄生虫駆除のおはなし）

（有）シェパード　獣医師　松本大策

　こんにちは、みなさん今年のゴーデンウィークはいかがお過ごしでしたか？おかげさまで僕も全ッ然休めませんでした（涙）。こうやってこの国は支えられているんですよね。いまは鳥取・岡山のコンサル先の巡回を終えて鹿児島に帰る列車のなかでこの原稿を書いてるところです。

　コンサルに入ると、いつも感じるのが「肉用牛の仕事は時間がかかるなあ」ということです。たとえば、養豚でしたら妊娠期間が114日ですから、ぼとん伸しよう管理を変更しても、あるいは新生子豚からの飼養管理を改善しても、肉用牛の1／3くらいの期間で結果が出ます。乳牛だって乳質改善でしたら肉用牛よりもずっと早く結果が出せます。肉用牛は、なかなか変化が出ないのです。このことは、逆に言うと「悪い方向へ向かっていても気づきにくい」ということでもあります。みなさん毎日の仕事、大変でしょうが、ちょっとした手抜きが1年後、2年後の大きな損失となって帰ってくるので注意しましょうね。

繁殖のお話し　14

　さて前回は、子牛が産まれた時点で実施すべき3つの衛生対策のうち「初乳給与の重要性」と「生理的貧血の予防がどれだけ生産性の向上に役に立つか」というお話をしてきました。今回は、生後すぐ（といってもタイムラグはありますが）に実施したいもう一つの衛生対策である「寄生虫の駆除」についてお話ししたいと思います。

　みなさんは、牛さんの寄生虫の種類をいくつご存じですか？僕たち獣医師も、学校では数十種類覚えるのですが、実際に現場で問題になるものはそんなに多くないので、普通の獣医さんだったら10種類も挙げられたらすごい記憶力です。

　みなさんはコクシジウム、肝蛭、乳頭糞線虫、オステルターグ胃虫、クーペリアの5つも知っておけば十分だと思います。これらの虫は、それぞれ習性も寄生する場所も、病原性も違います。さらには効く薬も全然違うのです。

　コクシジウムというのは「原虫」という仲間で、腸に寄生して下痢の原因になったり消化吸収を妨げたりします。昔はよく血便の原因とされていましたが、最近では血便は混合感染したバイ菌（クロストリジウムとかサルモネラとか大腸菌）が主な原因であるということが分かっています。

　乳頭糞線虫は「線虫」といわれる仲間で、母牛の胎盤を通過してお腹の中で胎児に

感染したり、母乳の中に出てきて子牛に感染したり、皮膚から浸入したり、といろんな感染経路を持っています。皮膚からはいると肺に向かって進み、肺から気管を通って喉に出て食道に入って最終的に腸に寄生します。肺炎の原因にもなりますし、腸炎の原因にもなりますが、最も恐ろしいのは心臓を止めてしまう毒素を出しますから大量寄生すると、牛さんを殺してしまう（ポックリ病）ケースもあるということです。

オステルターグ胃虫やクーペリアも「線虫」の仲間ですが、前者は第4胃に、クーペリアは小腸に寄生します。どちらもたいした病原性は持っていませんが、ここがくせ者なのです。どちらも消化吸収を阻害するので、病気ではないけど子牛の成長が「少し」阻害されます。ということは、被害に気が付かないうちに経済性が落ちてしまうということです。こういうケースが最も注意しなければならないのです。

これらの駆虫ですが、コクシジウムはサルファ剤でやっつけることができますし、オステルターグ胃虫とか乳頭糞線虫、クーペリアなどの線虫と呼ばれるものはアイボメックトピカルなどのアバメクチン系駆虫薬でやっつけることができます。肝蛭は蝉虫という仲間でファシネックスという飲み薬で駆除できますから、わざわざ寄生虫の種類を覚えるのが面倒な方は、この3種類の薬を使えばよいということだけ覚えておかれたらよいでしょう。母牛と仔牛の両方とも駆虫しておく必要があります。これまで駆虫したことのない農場では、最初はすべての牛をいっぺんに駆虫します。それから母牛では分娩前1ヶ月から2週間のあいだに1回、子牛は生後1～2週間で1回、生後3～4ヶ月齢で再度駆虫するとよいでしょう。「線虫」と「原虫」は同時に駆虫した方がよいです。線虫駆除で原虫の寄生数がドッと増えるケースがあるからです。